

修羅場へ急げ

Gorô Tenkyû

ボギー 典厩五郎





修羅場へ急げ

Gorô Tenkyû

典厩五郎 ボギー

毎日新聞社

典厩五郎（てんきゅう・ごろう）

本名、宮下教雄。1939年9月東京生まれ。立命館大学文学部卒。新聞記者を経てシナリオライターとなる。1987年『土壇場でハリー・ライム』で第5回サントリーミステリー大賞と読者賞をダブル受賞。著書『ロマノフ王朝の秘宝』『修羅の旅びと』他

修羅場へ急げボギー

一九九二年九月五日 印刷
一九九二年九月二〇日 発行

著者 典厩五郎

編集人 深瀬正頼

発行人 戸田栄輔

発行所 毎日新聞社

〒一〇〇—五一 東京都千代田区一ツ橋

〒五三〇 大阪市北区堂島

〒八〇二 北九州市小倉北区紺屋町

〒四五〇 名古屋市中村区名駅

印刷 凸版印刷
製本 大口製本

万一、落丁・乱丁の本は、小社でおとりかえます

© Gorō Tenkyū Printed in Japan 1992
ISBN4-620-10460-4

目次

- 第一章 俺たちは天使じゃない
- 第二章 三つ数えろ
- 第三章 彼奴は顔役だ！
- 第四章 化石の森
- 第五章 必死の逃亡者
- 第六章 大いなる別れ

装幀 荒川じんぺい

修羅場へ急げボギー

登 場 人 物

剣崎 国夫

(大活企画部員)

碓山 真理絵

(有楽画廊勤務)

碓山 銀子

(アイ広告社社長)

門前 清次

(興信所所長)

石野 珠子

(同事務員)

海津 陽一

(オリオン興行社員)

牧原 昭

(三栄商事社員)

仙波 元彦

(東京教育テレビ局員)

片倉 重介

(大活企画部長)

片倉 春彦

(警察庁警視)

藤丸 哲三

(シナリオ・ライター)

小松原早雄

(映画プロデューサー)

月森 美弥子

(大活女優)

夏村 繁樹

(映画評論家)

常盤松三四郎

(映画記者)

日下部鉄水

(大陸同志会理事長)

御田垣伊平

(同最高顧問)

第一章 俺たちは天使じゃない

北京――。

乾いた爆発音が数発、冬の夜空にひびきわたった。

「まだ起きていたのか」

夜中近くなつて、来客を送つて外出していた父がもどってきた。

来客は、二、三カ月ごとに父を訪ねてくる東京の警察官だった。警察官だと内緒で教えてくれたのは鉄おじさんだ。

しかも鉄おじさんによると、いまでもこそ警察官は父の同志だが、もとはといえば父を逮捕する目的で東京からやって来たのだという。

「雄平、また旅に出るぞ。今度はおまえもいっしょだ」

父が酒臭い息を吹きかけてきた。

父のいう旅とは映画の巡回上映のことだ。雄平は二度ほど、父の率いる

巡回上映班に同行し、満州との国境近くの寒村をまわったことがある。爆発音がひとしきり激しくなった。

壁の柱時計を見るとちょうど十二時。爆竹を鳴らして新年を迎える北京の風習は、戦時中であろうがなかろうがおかまいなしだ。

「父さんは悪いやつらに追われている。とうぶん北京にはもどれんから、小学校の教科書も持っていけ」

雄平はだまっとうなずいた。

現在、雄平は、紫禁城にほど近い日本人学校、東城第一国民学校の小学四年生だ。

父がだれかに追われていることは、薄々、気づいていた。父には秘密がある。そのためだれかに追われている。

爆竹はなおも鳴りやむことなく続いていた。

タイトルバック

夕方から降り出した驟雨は、夜になっても一向にやむ気配がない。

濡れた窓を透して、眼下には、聖蹟桜ヶ丘の駅前ビル群がまばゆいばかりの光彩を放っていた。ホームを発車した電車が、ひと筋の光の帯となって八王子方面へ走り去ってゆく。

多摩丘陵の高台。ここ夏村邸の応接間の窓からは、かつて武蔵野の名で呼ばれた平野が一望のもとに見渡せた。

昼間なら、無秩序に開発されつくした醜悪な光景がいやでも目に入る。だがいまは夜の帳にすべて覆い隠され、つかの間、無機的な美しい花園となって狂い咲いていた。

「待たせたな」

窓辺に立っていた剣崎国夫は声にふりむいた。

あるじの夏村繁樹が部屋に入ってきた。二階から赤ペンキをぶちまけられたようなアロハシャツにバミューダ姿。ひん曲げた口の端には禁煙パイプをくわえている。

「仕事はすんだのか」

「すんだ。いまファックスで送稿中だ」

夏村は天然パーマの長髪をうるさそうに掻き上げ、どっかとはかりにソファに座った。

「なんだ女房のやつ、お茶しか出してないじゃないか。酒の支度をしておけといったのに」

「いや、わたしのほうで断わったんだ。今日は用件だけで失礼する」

剣崎は立ち上がりかけた夏村を手でとめると、向かいのソファに腰を下ろした。

「つれないこというなよ。ひさしぶりに飲み明かそうと、一気に仕事片づけたんだぜ」

「すまん。こちら中小企業の親父だもんでね。明日は午前中、野暮用で関西まで行かねばならぬい」

「中小企業はご同様だよ。なにしろここ数年、飯より好きな映画さえ満足に見れないありさまなんだからな」

「商売繁盛でけっこうじゃないか」

「まあ、そうもいえるがね。けど昔のおれからは考えられないよ。今年の春先、映画雑誌が昨年の邦画ベストスリーをあげてくれといってきた。おれは絶句したよ。なんと年間、三本の邦画さえ見てないんだ」

「邦画に関するかぎり、わたしだって十本は見えないよ。だからあんたが罪悪感におびえる必要はない」

「願わくば、小使ちびるほどおびえさせてもらいたいもんだ。いまや香港、韓国、台湾のアジア映画の方が日本映画よりはるかに優秀でおもしろい。まったく落ちるとこまで落ちたもんだよな、日本映画も——」

夏村は派手に顔をしかめると、ソファに後頭部をもたせかけてため息をついた。

その昔、大手の毎朝新聞で映画担当記者をしていた夏村は、社内での配置転換を嫌い、思いきりよく独立して映画評論家となった。

フリーになった夏村は、若さにまかせて怖いもの知らずの論陣を張り、一躍、映画ジャーナリズムの寵児となる。映画全盛期、映画評論家といえど時代の先端をゆく花形スターだった。

だが映画界が斜陽となるや、まさきに失業の憂き目をみたのはその映画評論家だった。

それから五、六年、本人は充電期間と強がりをつけているものの、まったく鳴かず飛ばずの苦闘時代が続いたようだ。

やがて中間小説誌で夏村の名をちらほらと見るようになった。そして数年後には大衆小説の大きな賞を取り、見事再び、時代の脚光を浴びることに成功したのだった。

「あんたは二十年も前から、近い将来、日本映画界は腑抜けになると口をすっぱくして警告していたな。そしていまやまったくそのとおりになったわけだ」

剣崎が挑発的にいうと、夏村はスズメの巢のような頭を禁煙パイプでガリガリ掻いた。

「だからって、このおれが喜んでるなんてまちがっても思わんでくれよな。こう見えても内心は、トルコ嬢におちぶれた最愛の娘を思いやる父親といった心境なんだ」

「トルコ嬢とはちと表現が古すぎるな」
剣崎は笑った。

「それくらい映画界というのは古色蒼然で度しがたいのさ。救いようがない業界なんだよ。腑抜けどころかもはやご臨終とだっていい。もちろん日本映画そのものがなくなることはないだろう。タレントやミュージシャンが監督した、テレビの二時間ドラマ以下のしろものを映画と認めてのことだがね。いったいいつから日本映画界は有名人どもの遊園地になり果ててしまったんだ。それに考えてもみろよ。もうけはすべて会社が吸い上げ、どれほど映画がヒットしようと利益の還元は一切なしなどという業界がほかにあるか。資本主義の原則さえ平気で踏みじけるそんな業界がどこにある。しかもいまや自主製作してるのは京映一社のみで、他社は映画作りさえ放棄してしまっている。そのくせ配給網だけはぜったい手離さず、よそ者の排除となると異常な情熱を燃やす業界ときている。こんなアナクロ業界がいまどきどこにあるかというんだ——」

乱杭歯を剥き出して憤慨する夏村は、くわえている禁煙パイプをいまにも噛み砕きそうだった。

「救いようがないことに映画会社の首脳部は、日本映画の復興は超大作をヒットさせることだと思ってる。これがとんでもない錯覚だと気づこうともしない。はっきりいって日本映画界の首脳部

なんてみんなアホばかりだ。アホだからこそ首脳部になれたのだ。そもそも日本映画の歴史をふりかえってみても、超大作でおもしろい作品など皆無だったといっている。日本映画復興が仮にあるとするなら、通常の娯楽作品、いってみればプログラム・ピクチュア（二本立て興行の添え物作品）で地道に勝負する以外にないんだ。たまには映画でも見るかと劇場に入った観客に、日本映画もけっこうおもしろいやないかと再認識させる以外に手はないんだよ」

「日本映画がだめになったいちばんの原因は、プログラム・ピクチュアをないがしろにして手抜きをしたからさ」

「忘れてた。プログラム・ピクチュア最重視はあんたの持論でもあったな。こいつはとんだ釈迦に説法だった」

夏村はにやりと笑うとなおも続けた。

「しかし残念ながらもはや手おくれだよ。プログラム・ピクチュアを作るには、監督をはじめ、熟練したスタッフたちの職人芸が必要不可欠だ。映画を撮りたくても撮れない彼らはどこでなにをしている？ 安手のテレビドラマを粗製乱造してあたり才能を磨滅させているだけだ。つい最近、おれは知人に会うため数年ぶりで大活の撮影所へ行って愕然としたよ。撮影所で働いている連中の表情がおどろくほど暗いんだ。かつて撮影所は夢の工場と呼ばれたが、いまや絶望工場だよ。いったいこの国はどういう国なんだ。欧米では自国の映画産業をなんらかのかたちで保護してきたが、それは産業を保護するというより自国の文化を保護するという認識から出発している。ところが日本ときたら産業は必要以上に過保護にするくせ、文化となると自由化大歓迎で他国の侵略するにまかせっぱなしだ。いまさらこの国の政治家や役人どもにも申す元氣もないがね。それにしてもひどすぎるよ。だいたい、欧米諸国との貿易摩擦にだって、原因の一つは日本文化の輸出がまるでないにひとしいからなのだ。それなのに政治家や役人どもは気づこうともしない。外国は日本製品は知っていても、製品をつくっ

ている日本人を知らない。日本人の顔がさっぱり見えないから不気味だといわれるんだ。映画こそが日本人の顔になれるんだよ。黒澤明や小津安二郎がどれほど大きな役割を果たしてきたか考えてみるというんだ。黒澤や小津がもし日本にいかなかったらと想像すると、おれは背筋が寒くなるよ。しかもだ、絶望的なのは政治家や役人だけじゃない。民間人だって同じことだ。なにしろゴッホやルノワールを買い漁ったあげくが、今度はハリウッドを丸ごと買い上げようというんだからな。他国の文化や芸術を、金儲けになるという理由だけで買いまくる行為がどれほど下劣で卑しいかまるでわかってない。日本人はどこまで増長すれば気がすむんだ、そのうちきつとバチがあたるぜ。いや、もうあたってるのかもしれないな。日本は経済的には飽食した肥満児だが、精神的には衰弱した栄養失調の欠食児童も同然さ。かつていまほど薄っぺらで心の貧しい時代を、われわれの先祖は持ったことがあるのかどうか聞いてみたいもんだ。まったくやり切れないよ」

「あんたのいうとおりだろうよ。そこでといつてはなんだが、用件に入っているかな」

「あらたまってるんだい」

「いまの大ボヤキを日本映画臨終論としてまとめてくれないか。単行本としてウチから出版させてもらいたいんだ」

「おれのほかにはだれに声をかけるつもりだ」

「あんたひとりだよ」

「それはだめだ。連載物を月五本も抱えてるんだぜ。正直いっておれは出版人としてのあんたの姿勢を尊敬してるし、できるものならなんとかしたい。だから五十枚ぐらいならひきうけるが、単行本一冊分はとてじゃないが無理だよ」

「わかってる。新しく書き下ろす原稿は七十枚でいい。わたしが目をつけてるのは書斎の戸棚にあるやつだ」

「書斎の戸棚だと」

「鳴かず飛ばずの浪人時代、怒りにまかせて書きなぐったというノートだよ。びっしり書いてあったから三百枚にはなるはずだ」

「あのノートをどうして知ってる」

夏村はヘソクリの通帳でものぞきこまれたような顔をした。

「いつか見せてくれたじゃないか。そのうちこのノートを紙爆弾にして、映画人たちに活を入れてやるんだと」

「酔っ払ってたとみえてさっぱり覚えがないが、いまはまだ時機尚早だよ。なにしろ現役の映画人たちをめた斬りにした内容だからな」

「だからこそ、ショック療法としていま出すべきなのさ。現役連中が死んでしまってからでは気の抜けた回顧談でしかない」

「とかなんとかうまいこといって、あの内容ならある程度売れるとソロバンをはじいてるんだろが」

「ソロバンをはじいたのを否定するつもりはない」

剣崎は苦笑して素直に認めた。

「たしかに死んでしまってからでは証文の出しおくれかもしれない。よしいだろう。そのかわり今夜は泊まっていけよ。午前二時にはお情けで寝かせてやるからそれまで付き合え」

「わかった。仰せにしたがうよ」

「では酒の支度をさせてくる」

夏村が立ち上がる。

その時、部屋の隅に置かれた電話が鳴った。近寄った夏村が受話器をとった。

「——そうですが、ええ、ここにいますからお待ちください」

そういうと、受話器の通話口を手でふさいで剣崎を見た。

「友人の仙波^{せいは}だといってるが」

剣崎はうなずくと、電話をかわった。

「もしもし、剣崎だが」

「おまえの自宅にかけたら、そちらだと教えられてね」

仙波元彦の声音はいつになく神妙だった。

「なにかあったのか」

「海津^{かいづ}が交通事故で大怪我をしたんだ。目下、意識不明の重体でね——もしもし」

「聞いている」

「いま病院からかけてるんだよ。東神田にある神田総合病院だ。これからこっちへ来れるか」

「すぐそちらに向かう」

電話を切って腕時計を見ると、すでに十一時に近い。

「どうした、なにか事故でも？」

夏村が眉をひそめて訊く。

「友人が交通事故で重体らしい。あんたもよく知ってる海津陽一だよ」

「東亜産業会長のか。たしかあんたとは大学時代からの親友だったな」

剣崎はだまっとうなずいてからいった。

「すまないがタクシーを呼んでもらえないか」

「病院の玄関に入ると、だだっ広いロビーだった。」

すぐ右手の窓口が受付になっていたが明かりはついていない。

折よく看護婦がロビーを横切ろうとしたので、呼びとめて海津の病室をたずねた。正面の廊下を突きあたって右奥だといわれた。

突きあたりを曲がると、廊下の奥に十人近い男たちが屯^{たむろ}しているのが見えた。東亜産業の幹部たちだろう。

近づいていくと、男たちとは離れたベンチに座っていた二人連れが剣崎に気づいて立ち上がった。ひとり電話をくれた仙波、もうひとは同じ大学仲間の牧原昭^{あきひろ}だった。

「容態はどうなんだ」

目顔で二人と挨拶をかわしてから剣崎が訊いた。

「看護婦の話では大丈夫だといってたがね。なにしろ頭蓋底を骨折してるらしいんで、予断を許さないんじゃないかな」

虫眼鏡のように度のきつい眼鏡をかけた仙波が、ズボンをずり上げながらいう。ほとんど一分と間を置かず、眼鏡かズボンをずり上げるのは昔からの仙波の癖だった。

「こういう状況の事故だったんだ」

「酔っ払いを避けようとして、電柱に激突したらしい。この近くの中央通りで九時過ぎのことだとき。雨で見通しが悪いうえにスリップしたんだろうな」

「自分で運転していたのか」

仙波はこくりとうなずいた。

「上野にあるコンビニへ行つての帰り道だったんだとき。今日は日曜だから自分で食事の支度でもするつもりだったんじゃないのかな」

「鎌倉の家から上野のコンビニへ来たということか」